

第2回そうかりノベーションまちづくり構想検討委員会 議事録

■開催概要

日 時	平成27年12月21日(月)午後6時～午後8時
場 所	草加市立中央公民館3階 第1・第2講座室
出席者	委 員 長 清水 義次(株アフタヌーンソサエティ) 副委員長 中村 卓(副市長) 委 員 佐々木 誠(日本工業大学 建築学科) 〃 米山 昌幸(獨協大学 経済学科) 〃 染谷 勝之(有勝建築設計事務所) 〃 長谷部健一(税理士法人L & Cアシスト) 〃 木村 忠義(株草加不動産) 〃 野口 貴史(有恵登屋本店) 〃 小野良一郎(株潤製作所) 〃 今井 慶子(カフェギャラリー コンバージョン) 〃 矢口 真紀(ちょいなかワークス) 〃 中山 加奈(株デイズフレッシュ) 〃 上原 美香(ガーゼショップアンジェ) 〃 小林 勝治(総合政策部長) 〃 曾合 吉雄(自治文化部長) 〃 橋本 吉朋(子ども未来部長) 〃 黒須 俊之(建設部長) 事 務 局 宮本 恭嗣(株アフタヌーンソサエティ) 〃 高橋浩志郎(産業振興課長) 〃 工藤 健一(産業振興課課長補佐兼商業係長) 〃 夢田 章吾(産業振興課主任)
次 第	1. あいさつ(副市長) 2. 草加市の現状把握について(夢田) ～草加市における女性・子育てママの現状～ 3. ショートレクチャー ゲストスピーカー 嶋田洋平氏 4. 意見交換
決定事項	

■ 議事内容

1. あいさつ

中村 （副市長あいさつ）

・旧道沿道リノベーションまちづくりについては、事業を開始してまだ1年も経過していないが、3月の清水先生の講演会をしていただきまして、6月には「キック・オフ・ミーティング」。9月連休中の21日、22日には「そうか 実践！家守塾」で具体的なリノベーション事業計画の検討が行われた。そして、同じく9月には「第1回そうかりリノベーションまちづくり構想検討委員会」が行われ、議論が行われた。そして、つい先日の12月1日には大島先生をお招きして、「あなたでなければ ここでなければ いまでなければ～遊休不動産を地域活性化に活かす～」と題し、熱い講演をしていただいた。

・各回の終わりにある懇親会についても、たくさんの方に出席いただいている。

・草加市については、他市と比べても「市民力」が強く、様々なイベントも市民の皆様が中心となって行われている。

・直近でも10月4日は宿場まつり、11月3日のふささら祭り（20万人）、11月22日には街グルin草加（15万人）には多くの参加者がお越しいただいた。草加市以外からも来ていただいているのではないかな。そういう点からも草加市が本当にいいまちだということは市民の皆様にも思っていることだと感じている。

・問題はイベントがいつでも行われているわけではないことであり、イベント以外の時に、この旧道沿道ににぎわいを取り戻すということが必要である。旧道沿道には多くの方が住んでいるが、買い物や食事をして、生き生きと豊かに暮らす場としては十分に市民の皆様に使っていただけていないという状況。

・このピンチをどうやってチャンスに変えるか、そしてそのチャンスを活かして夢を実現していくか、行政もしっかりと取り組んでいきたい。

・行政としては機構改革において「リノベーションまちづくり推進係」というのを設置し、専属の職員を配置して、不退転の覚悟で事業に取り組んでいきたいと考えている。

・来年度は具体的に形にする年だと考えている。来年に向けて、このリノベーションまちづくりの取組を、行政、市民の皆様、地域の皆様と連携して進

めていければと考えている。	
２．委員紹介	
事務局	（委員紹介）
３．議 事	
清水	（委員長あいさつ） ・本日のテーマは「女性創業とまちづくり」 ・まずは事務局から、テーマに関しての草加市の現状について説明してもらいたい。
事務局	（資料「女性創業とまちづくり」を元に以下について説明） ・人口構成について ・世帯構成について ・婚姻・離婚、ひとり親世帯、生活保護について ・合計特殊出生率、待機児童について ・女性の労働力率について ・草加市子ども・子育て支援事業計画ニーズ調査について ・草加市の子育て環境や支援について ・女性創業の特長について
嶋田	【嶋田洋平氏プロフィール】
ゲスト・カ-	らいおん建築事務所代表取締役/北九州家守舎代表取締役/都電家守舎代表取締役/リノベーション代表取締役 1976年福岡県生まれ。東京理科大学理工学研究科建築学専攻修士課程修了後、建築設計事務所「みかんぐみ」チーフを経て、2008年らいおん建築事務所を設立。2012年北九州家守舎を、その翌年には都電家守舎を設立し、生まれ育った北九州市の小倉、そして家族と暮らす豊島区雑司が谷の間を行き来しながら縮退エリアにおけるリノベーションまちづくりによる再生事業を行っている。小倉魚町での実践によって「国土交通大臣賞」「都市住宅学会業績賞」「土地活用モデル大賞審査委員長賞」「日本建築学会賞教育賞」を受賞。著書に「ほしい暮らしは自分でつくる ぼくらのリノベーションまちづくり」(日経BP社)、共著に「2025年の建築 七つの予言」(日経BP社)、「最高に気持ちいい住まいのリノベーション図鑑」(エクスナレッジ)等。 （ショートレクチャー） ・補助金によって民間の自立心を削いでしまい、まさに麻薬と同じ。 ・本日の内容は、北九州市で行われた民間不動産オーナー、現代の家守、行政の三者が連携して公民連携で行う補助金に頼らないリノベーションまちづ

くり。

- ・北九州市の本質的な都市経営課題は「質の高い雇用層」の流出。
- ・2010年、リノベーションまちづくりの取組をはじめ、翌年に「小倉家守構想」を策定し、策定の2ヵ月後に最初のプロジェクトが実事業化。
- ・若い人たちが新たにまちでチャレンジできる場がなければ、その人たちが成長しない。本来はその成長が建物を使うというニーズになる。成長してもらうためには、そういう人たちのスタートアップの敷居をいかに低くして、まちなかでの創業を助けるかというのがリーディングプロジェクトでやろうとしたこと。
- ・手を挙げた若者たちの家賃希望価格は1万円とか1万5千円。ただ、広い場所は少ない。2～3坪程度を安く借りたいというニーズがあった。これは坪8千円ということであり、相場と比較すると利回りがよい。
- ・30%が空き家率の商店街にいきなり10店舗、補助金を使わずにオープンするというインパクトがすごかった。
- ・北九州には年に2回大きなマーケット（市）が開催される機会があって、そこでは300人程のクラフト作家が出店する。この方たちは普段家にいる。その人たちが場所をシェアして、自分のアトリエが持てて、お客さんと接することができる場所があったら、まちにインパクトが与えられる。
- ・リノベーション事業は利回りが高い投資である。利用者にとっては、安い賃料で必要なスペースだけを借りることができる。双方にとってメリットがある。
- ・入居者の中には、ここでビジネスとして育てて軌道に乗った後、巣立って行った方もいる。趣味がビジネスに「カチッ」と変わる瞬間がある。そのためには「場」が大切。
- ・マーケットを行うことは、担い手の発掘には有効な手段。
- ・アーティストはまちにいない。家にいる。「私、アーティストです」という顔をして歩いている人はいない。そういう人に女性が多い。
- ・そういう方はまちに子どもを連れてくる。期せずして、まちなかのお祭りが復活した。ただ単に雇用の創出だけでなく、にぎわいの創出という副産物も生まれている。
- ・豊島区の課題はファミリーが住むことができる住宅がないということ。
- ・まずはエリアにある遊休化したストックの塊を見つけることが大切。
- ・1階を倉庫に使っている物件は、あきらめずに交渉。自分は、倉庫の荷物を寄せて、空いているスペースを借りた。大家さんからしたら、その分の賃

料が単純に増加する上、かつ、常に人がいるという状態が手に入る。

- ・工事をしなくても、「使い方」を変えることも立派なりノベーション。

- ・「使い方」の問題として遊休ストックの活用方法をみんなで考える。

- ・自分の妻が働き方を見直して、自分でカフェを開業した。

- ・そのカフェには、子どもの手が離れてちょっと働きたいという女性が多くやってくる。カフェであれば、ランチタイムの2、3時間のみ働いてくれる方は大歓迎。

- ・また、妻は子どもをつれて働きたいと思っていたので、カフェの中に子どもがいられるスペースが設けられている。

- ・空き家を借りて、空いている部屋で民泊をしている方は「住むこと自体が働くこと」になっている。家で稼いでいけないなんてことはない。

- ・農業と漁業の持続という課題。オフィスビルの2階の空室問題。子育てしながら自分たちが働ける場所がないという課題。飲食店がファミレスしかなく、子どもと安心していくことができる店がない。これらの解決を補助金に頼らないで解決する「都電テーブル」というプロジェクトを進めている。

- ・池袋にあるこだわり商店の安井浩和さん。価格競争に陥らない、店主が認めた商品だけを販売する商店を経営。一見するとスーパーであるが、スーパーには決して置いていないような商材だけを販売している。

- ・都電テーブルではそのこだわり商店の食材を使っているため、子どもと一緒に安心して食べに来ることができる。

- ・都電テーブルが入るビルには幼児教室があったり、コワーキングスペースがあったり、働ける環境は民間で作ることもできる。保育園を作るだけが能じゃない。

- ・飲食店はまちの公共空間。全国の生産者、まちの子ども、全国のまちづくり関係者、まちの主婦、区民や行政の人も来る。そして、人が集まる場ではおもしろいことがたくさん起きる。

- ・草加市でも第1号案件はまちに開きまくって、面白い人をたくさんあつめて、このリノベーションまちづくりに加わってもらえばいいと思っている。

- ・今の農産物は「スーパーでいくらで売るか」ということが最初に考えられている。しかも、流通経路において何人もの手に渡り、誰が作ったかということがわからなくなり、少ない利幅と顔の見えない関係を作る。

- ・いいものを作る人は、それに見合った利益を得る仕組みにすべく取り組んでいるのがこだわり商店の安井浩和さんである。この仕組みができないと日本の農業はなくなってしまう。

・それをこだわり商店と都電テーブルという事業がしっかりと販路になってあげて買い支え、また、生産者がもっとも知りたいと考える消費者の声を集める場として機能している。

・都電テーブルは、女性の働く場所を作り、生産者の農産物にかかる中間コストを抑えたうえで買い支えている場。

・都電テーブルは農産物の六次産業化を実践している。この事業に補助金は使っていないが、豊島区の金融支援（制度融資）をしてもらっている。

・不動産オーナーが意識を変えて、使い方を変えることでまちの地域経営課題が小さいかもしれないが解決できる。

・人口増加の時代には住宅はプロダクトアウトで、建てておけば誰か使う人がいた。しかし、今は違う。戦略を持ってどういう人に住んでもらうかということを考えて、そのターゲットに合ったサービスを供給するかということを考えることが重要になってくる。

・目白通りには空き店舗が1店舗もない。ところが、使える場所はある。それは「軒先」。移動販売車を使って、この隙間を使う。不動産オーナーにとっては、心理的ハードルが低く利用させてくれることが多く、軒先を利用したまとまった数の自転車が集まってマーケットを開催するだけでも、まちに与えるインパクトは大きく、ガラッと変えることができる。

・空き家がないなら公共的な空間を使おう。

・今ある空間資源を活用しよう。

・今あるものを活かして新しい使い方を考えていこう。解体新築より収益性が高くスピードが早い。

・まちづくりはまちのコンテンツづくり。面白い人の周りには面白い人が集まってくる。

・今、日本は人口縮退局面。人口増加時代にやってきたことは、ことごとくうまくいかなくなっている。

・リノベーションまちづくりというのは、入れ物にコンテンツを作ること。入れ物を改修することではない。コンテンツに併せて、結果として入れ物を少し改修することはあっても、あくまで目的はコンテンツを作ることであるということを間違っはいけない。

・人口増の時代には箱をどんどん作れば、あとから使う人が現れた。でも、人口減の今は箱があり余っている。その箱にひとつひとつ何を入れるかを考えていくのがリノベーションまちづくりである。

・現在の局面でもっともやってはいけないことは、今ある箱を壊して新しい

箱を作ること。特に再開発という手法。

・今、町田で進行中のプロジェクトの紹介。物件周辺は子育てにとって環境がいいという点に着目し、増えているシングルマザー向けの賃貸住宅を提案。元気な高齢者とシングルマザーと子どもが一緒に住む住宅。入りたいという人がいたら、300万円程度かけてリノベーションする予定。

・使われていない空間の使い方を考える時代になった。

・女性が働く場所を作るということも大事。働くための環境を整えるために、様々な民間サービスも必要になる。

・戦後、自営業者数が激減し、日本はほぼサラリーマン。女性の就業率についても最近では上がってきてはいるものの、子育て世代は低いのが現状。ただ、女性の自営業者においては、結婚、出産を経てたとして、年齢別に変化が出ない。ここに女性が創業する意味というのがある。しかし、その前にやっぱり就業。そういう意味ではやはり、結婚、出産を経験してもいかにして復帰するか、どうやったら女性たちがほしい暮らしや働き方を自分たちでつくれるかということを考える必要がある。

・自分が実践していることとしては、すべて徒歩圏内で生活しているということ。保育園、小学校、事務所、カフェ、家、すべて徒歩圏内。食育住遊職超近接というのが、女性がはたらくということの答えの1つではないか。

・グラデーションを持って働く。今の日本は働くことについて0（ゼロ）か100しかない状況。この間を作っていないと、女性の就業は増えていかないと考える。

・行政の男性職員が女性の起業とか言う前に自分で起業してみる、自分のやったことないことを人に言うな、というのが自分の正直な意見。

・と言っても無理があると思うので、せめてまちの声を聞いて、そういう政策を打っていくかというのを、こういう場で議論できるというのは素晴らしいこと。

（意見交換）

上原
委員

・自分はガーゼショップをやっているが、店舗は持っていない。

・市の子育て支援センターが行う「スマイリーママ」というサークルに所属している。この団体は当初12名だったメンバーが、現在は18名になっている。

・自己資金がないので、店舗を持つことはできないので、安く出店できる場所をいつも探している。会費とかがあるわけではないので、出店する際は出店者で費用を分担し負担している。

	・現在の１８名では一斉に出店できるイベントがなくなってきている現状で、今後の活動場所を検討しなければならなくなってきている。 ・しかし、どこかを借りるにしても、どれだけ売れるかわからないという状況であると同時に、どの会員も午前１０時から午後３時までしか働けないという制約がある。 ・先ほど嶋田氏のレクチャーの中にあったような小間貸しスペースがあれば、ぜひ利用したい、自分がそこに入居したいと思った。
清水 委員長	・それだけの人数がいれば、すぐにでも始められる。あとは不動産と家守がいて、マッチングしてくれればいいだけの話。 ・もっというと、そのようなビジネスの場合どのようにやったらビジネスが安定するか、うまくいくかということのアドバイスがあればいい。 ・そのアドバイスは、新宿伊勢丹の店次長をしていたマーケティングのプロである徳光次郎（徳光和夫の弟）のマーケティング講座のようなものを実施することで得ることができる。 ・この講座から得られることをうまく実践できた方のビジネスは、どんどん発展していく可能性がある。 ・そういったことも組み合わせていくと女性のビジネスが安定的になっていくのではないか。
矢口 委員	・草加市で月３万円ビジネスといいまして、子育て、主婦世代に対してビジネスを作って、自分の趣味や特技、好きなこととまちにいいことを組み合わせて、月に３万円稼ごうという講座を８月から１１月に行い１６名の卒業生が輩出した。 ・嶋田氏のショートレクチャーの内容はうなづくことだらけ。 ・男性からすると、借金して箱を借りるとか、法人化するとか、商工会議所と話せるようになるとか、そういうことが起業だと思われるのがやはりある。 ・その点についてはなかなか話が合わないというのが３ピスを主宰いる立場として忸怩たる思いがある。 ・嶋田氏の話に合ったような少額小スペースで借りられる場があっても、それを起業としては見てもらえないということがある。 ・郊外型のベッドタウンにおいては、やはり男性が働いてお金を稼いできて、それを消費する女性という構図が残っている。この部分の話がなかなか進まず、起業の概念が理解されない。 ・商工会議所に起業したということを言いたいわけではなくて、小さくても

	一歩を踏み出したいというのが３ピズ卒業生の気持ち。 ・まさに嶋田氏が行っていた「場が人をつなぐ」という、その「場」がほしい。だけど、どうやってやったらいいかと卒業生は試行錯誤している。 ・ぜひ、草加においても１６名の卒業生の活躍の「場」を、ぜひ見つけられるように行政はもちろん、皆さんに支援してもらいたい。
嶋田 ゲストスピーカー	・まず、商工会議所とは付き合わなくていいのでは。 ・最初は小さく始めたビジネスも大きくなる時がくる。趣味の領域がビジネスに、最初の一歩を踏み出した時ではなくて、その中から何人かが巣立っていく、その何人かの塊が新たな産業になっていく、そのようなことを草加のまちでも起こしていくということが必要になるのではないかな。 ・草加市は消費のまちになってしまっている。生産して外貨を稼ぐようなまちになっていくとまちの中でお金が循環していくのではないのでしょうか。
高武 ワザバー	・草加市のチャレンジショップOhanaに入居して、お片付けの仕事をしています。 ・嶋田氏のご紹介したシングルマザー向けの住宅にすごい感動しました。 ・私自身もシングルマザーですが、シングルマザーで起業している人はものすごく少なく、３ピズなども主に主婦向けという気がしていて、シングルマザーこそ、なかなか働く場がなかったり、就業することが厳しいので、起業したいと考えていると思うが、そこに対する支援というのがチグハグで機能していない。 ・自分の子どもは２０歳と１７歳で、手が離れるということで、何とか起業することができた。しかし、子育て中のシングルマザーでは、とても起業ができるような状況にはないはず。 ・起業ができない理由、シングルマザーになった理由のひとつに「保育園に入れなかった」というのがあるはず。私自身も子どもを保育園に入れたかったのですが、とてもとても入れる状況ではなかった。そのため、義理の母に預けて働くしかないということで、働くことをあきらめた。自分は、こども二人が幼稚園に入るまでの６年間働くことができず、夫婦仲が悪くなっていった。世の中ではあまり声が上がらないが、実態としてはあるのではないかなというのを実感している。 ・その時に起こる夫婦の気持ちとしては、女性は「男性は外で働けていいな」、男性は「お前は家にいていいな」という感覚になり、その中間がないこと、保育園に入れないというシャットアウトされている状況、世間から隔絶されているという状況が確実にシングルマザーの増加に影響している。

	・そして、私が20年前に経験したことがいまだに続いているということが実態なのではないか。 ・子育てや創業についての支援が様々あることはありがたいと感じているところではあるが、まだまだ待機児童についての支援が薄いのではないかと感じている。 ・この点を何とかしない限りは、いつまでも根本的には解決しないのではないか。
嶋田 ゲストスピーカー	・今おっしゃっていただいたことは、真実だと思う。 ・自分の妻も育児ノイローゼになりかけた。その時の自分がした解決策としては、お金を渡して買い物に行ってもらうことくらいしかなかった。 ・母親は24時間子どもから解放されないという大変さがある。 ・それをなんとかするため、自分の事務所で経理のスタッフを採用してみた。その採用条件が土曜日だけ自分の好きな時に好きな時間だけ働いていいというもの。これはものすごく感謝された。 ・それ以外にも、子どもと離れている時間が得られたこと、子どもを父親に預けてくるので、父親と子どものコミュニケーションが円滑になった、その結果、母親自身の父親とのコミュニケーションもうまくいくようになったなどの効果があった。 ・ただ、子どもが大きくなって豊島区を出ていくファミリー層の実態も、現場で感じることもできた。 ・失礼な話ではあるが、大企業の仕事というのは誰でもできるということが多い。その仕事を2、3時間分、主婦の人に解放したらどうでしょうか。これは結構、本質的な解決になるのではないか。 ・あとは住むところ。
中山 委員	・レクチャーの中にあったワンフロアを分割して安価な賃料で貸し出すというのは自分にとっては新しい考えで、非常に参考になった。 ・自分は草加市において家守をやろうかと考えている。どの程度の物件があるか把握し切れてはいないが、そういった理想的な物件があるのかどうか、この場に不動産関係者の方がいらっしゃったら教えていただければと思います。 ・また、子育てをしながら仕事をしたい方もいれば、子育てから離れたいという二面性がある。その二面性を支えるサポートについては、まったく異なることになると思うが、それぞれをどのように細かく決めて、作り上げていくかが大切になるのではないか。

	・自分自身も子育てをされている主婦をパートとして雇っていたが、一番困るのは子どもの急病。私としては、子どもを犠牲にしてほしくない、すぐに帰ってほしいと思うと同時に、今帰られては困るという考えもある。このようなときに、皆さんはどうしているか、意見がきかせていただきたい。 ・草加市の病院やサポートについても聞きたい。 ・そういった部分を活用することで女性が短時間でも働ける環境というものができてくるのではないかと考える。 ・女性の短い働ける時間の中で、どのような働き方があるのかアドバイスがあれば聞いてみたい。 ・このような場で働きたいという女性の熱意があることがわかったので、どのように環境とのマッチングをすればいいのか考える機会になった。
橋本 委員	・病幼児の保育というのはなかなか難しいのが実態。施設としては病幼児向けのものはないのが現状。 ・しかし「ファミサポ」という制度の中で、頼む人と頼まれる人をマッチングして病幼児でも預かりますというものがあり、実際に利用されている方もいらっしゃる。行政の制度としては「ファミサポ」というものしかないのが現状。 ・これは行政の立場としてではなく、一個人として意見であるが、できれば病幼児はご家庭で看病するのが、子どもにとってもいいのではないかと。 ・また、仕事としても多少柔軟性のある仕事というのが、実際にあるのかなということも考えてみてもいいのではないだろうか。
嶋田 か	・子どもというのは、だいたい夜中に熱を出す。それで、次の日保育園に行けないという状態になる。 ・以前は、自分自身もこどもの発熱のために、すべての予定をキャンセルして子供の面倒をみたこともあった。しかし、自分はそうすることで妻が休まなくていいようにするくらいのことしかできなかった。 ・そこで思ったのが、病気の子どもを連れてきて働ける環境があったらいいということ。 ・私の移転する事務所には、学校帰りの子どもがいられるスペースを作って、母親の仕事が終わるまではいてもいいというような場を作ろうとしている。そういう子供が5、6人集まれば、従業員のうち1人くらい、その子供の面倒を見ていても大丈夫ということになる。そして、そこには保育士の資格はいらない。 ・そしてありがたいことに看護師の資格を持った方が応募してきてくれた。

	・つまり、地域にあるリソースを使って行えば、行政から補助金をもらって病児保育の施設を作らなくとも、少なくとも、そこで働いているママたちの課題の解決にはなる。 ・みんなの課題を解決するなんて大きなことではなく、小さくおおらかに考えて、自分の周りだけでも、自分の周りにあるリソースを使って解決することを考えればいいのではないか。
佐々木 委員	・女性の創業には小規模、つまり規模の小ささが重要であることがわかった。また女性の創業はアイデア次第ということもわかった。 ・タイムシェアリングといった時間や空間を区切って活用するということが大切。 ・自分は千住いえまちというプロジェクトをやっているが、それもすべてアイデア次第ということで、様々なことをやっている。 ・本日はこの千住いえまちプロジェクト代表の山崎も来ているが、自分たちも家守という立場で関わろうと考えているが、なかなか今やっていることも含めて、事業化というのが不得意なものと認識している。 ・ぜひ、アドバイスをいただきたい。
嶋田 ゲストスピーカー	・先ほど18人のコミュニティ、16人のコミュニティがあるという話があった。そこが起点になればいい。その方たちが払える賃料、その方たちが出せる参加費で、その事業が回るかということに対する投資という考えでいい。 ・今までの開発というのは、いくらかけたから家賃がいくらという考え。作る側の論理で、使う側の金額が決まる。しかし、それは間違い。 ・自分は事業を行うにあたっては、エンドユーザーからしか起点はないと考えている。逆に言えば、そのエンドユーザーの束（18人、16人のコミュニティ）がすでにあるので、自分としては事業化できているも同然と考えている。 ・そして、その事業を場所とセットで見合う投資額を考えて、どのようにその資金を調達するかということになる。 ・自分が北九州家守舎をやった時には、最初の投資額として400万円が必要だった。自己資金は半分程度しか集まらなかった。残りの半分は代々まちに住んでいる不動産オーナーや旦那衆が出してくれた。今日、草加のまちを歩いたが古い宿場町の名残があったので、「草加のためなら」とお金を出してくれる旦那衆がいるはず。 ・ただし、その際にはきちっと事業計画を説明できなければならないし、ど

	ういった収益が上がるのか、収益を柱を説明した上で、最後に「草加のために」をキーワードにすれば、いけるのではないか。 ・自分でもリスクを取れば、それを応援してくれ人は必ず現れるし、それが続いていけば金融機関も資金を貸してくれるようになり、ファイナンスがついてくるという流れになる。 ・最初は小さくてもいいので、大きく育てるということが重要。
清水 委員長	・北九州家守舎の最初の資本金は50万円。それを4人が拠出したというのが始まり。 ・最近のプロジェクトの投資額は6,000万円。事業とはこういうこと。 ・小さくてもしっかりと継続的に行っていくということをや。それがスタート。そしてステップを踏むごとに、徐々に信頼を得ていくとサイズを大きくすることができる。 ・楽しく継続するためには関係する人に少しでも利益が残るということを継続的に行っていないとつらくなる。損ばかりして補填するというのは嫌になる。 ・小さくてもしっかりした形で組み立てる。 ・仮に18人が8,000円ずつ賃料を支払うような事業があれば、月の家賃としてはものすごいことになる。
嶋田 ゲストスピーカー	・その18人だけでなく、その方たちに友達がいる。例えば3人ずつ友達がいるとすると……。大変なことになる。 ・最近、他の自治体でもこのような場に出た時に思うことは、「行政は何をしてくれるんだろう」と様子をうかがう民間がいることを感じる。そういうことは考える必要ない。事業はやっちゃったもん勝ち。 ・行政はそういう風にやった人のことを見ている。「ほんとにやるのかなあ」と見ているだけかもしれない。 ・でも、やった人のことは全力で応援してくれる。北九州市でも豊島区でも、それは経験しているので間違いない。 ・行政が「何を助けてくれるのか」なんてことは思わずに、自分がやりたいことがあったら、まずやってみる。行政は必ず、それを後押ししてくれます。
清水 委員長	・行政は「自立できる民間」を応援したい、それがこれからのまちづくりの形。 ・以前は、行政が補助金などのお金を持ってきて、それをまちに投資するとまちがよくなっていったという時代。成長時代の日本においてはこのやり方

	でよかった。 ・これからの時代の中では、民間が自立して継続してやっている方々を、行政の立場でどのような方法で支援できるかということを行政が考えて、さら - い民間を伸ばしていくという流れになっていくということをリノベーションまちづくりにおいて実践していく。 ・リノベーションまちづくりは、単に古い建物を使うということだけがリノベーションまちづくりではない。 ・ビジネスを興すこと、コミュニティの再生すること、福祉についても、教育についても、課題があったら、民間が民間のアイデアで自力でどこまで、どのくらいできるかを考えてやっていき、行政は後ろからそれらを支援していくという形をとっていくのが、これからのやり方。 ・そうすれば、行政がいなくても民間だけで継続してまちが成り立っていく。真の市民力とはそういうことではないだろうか。
氏家 傍聴者	・私はアパレルの縫製工場で技術を磨き、技能士を取って、子育てをしながら縫製の仕事をしていたが、海外での製造が増えたことで収入が激減した。 ・１０年くらい前にペット産業が伸びるということを聞いて、ペット用の衣料を作るようになった。そして、ペット用の衣料についてはねっとでの朱蒙が来るようになった。 ・そして現在はお直しの需要も多くなっている。その中でお直しのお客様からフルオーダーでの洋服作りの依頼が再び来るようになった。 ・工場での大量生産が増えてくることにより、縫製ができるかたがなくなってきたため、お直しの需要が多い。 ・自分は来年度、犬用のオーダー服で起業しようと考えていて、その中でコラボということも考えている。これから少しずつビジネスを大きくしていけるようなことを考えたい。
嶋田 ゲストスピーカー	・個人的な意見として、これからのペットのオーダーメイド服は、事業としてかなり大きく成長していると思っている。 ・北九州の事例にあったポポラートにも、ペットのオーダー服を作っている人がいたが、巣立って自分でアトリエを構えるまでになった。 ・今、子どもの数よりペットの数の方が多い。 ・ちょっと違うかもしれないが、気仙沼の年配の女性はセーターを編むのが得意。その年配の方たちを束ねて「気仙沼ニッティング」というブランドを立ち上げた御手洗さんという人がいる。 ・このセーターが１５万円とか２０万円とかで販売されていて、高倉健さん

	とかも着ている。手編みのため現在、３００人待ちという状況。これは地元の方々が手で編むため。 ・こういうのが、まさに新しい産業というのではないか。 ・縫製の技術については若い人はもちろん、もっと年配の方にも活躍してもらえるようになればいいと思う。 ・それをデザインと併せて、かなりの高価格帯でも販売できるようなペット衣料のブランド化は小さいながらも、少しずつ継続していけば、期待できるビジネスではないかと考えている。
清水 委員長	・自分も前回の検討委員会でその話を聞いて、有望だと思った。 ・間違いなく有望、ぜひ、そのビジネスを頑張っていただきたい。 ・草加のまちではペットがファッショナブルというのも面白い。
嶋田 ゲストスピーカー	・「スマイロン」という住宅系の雑誌において、話題になっているが「ペットと暮らせる家」というテーマ。ペットの数に対して、ペット可の賃貸物件が少なすぎるということが、課題になっている。 ・思いつきだが、「ペットが暮らしやすいまち」というのを草加が目指してはどうだろうか。極端な例を挙げると、ペット可の賃貸物件しかないというようなまち。真面目な話です。 ・福岡県の江頭さんという方がいる。「ねこ付シェアハウス」を経営している。自分の猫を入居者に見てもらおうということだが、ものすごい人気がある。 ・これからの日本の賃貸住宅はペット可の物件がふえてくると考えているが、まじめな話で草加市が真剣に考えていただければと思うのだが、もし「ペット可のまち」「ペットと暮らしやすいまち」ということを真剣に突き詰めていったら、日本中から住みたい人が大挙してくるはず。
清水 委員長	・自分もペットは大切な家族であると思う。 ・今日は「女性創業とまちづくり」をテーマに女性の視点からまちづくりを考えてみた。 ・この視点が、草加のまちをよりよいまちとして、住んでいて楽しいまちにするためには、昼間に草加にいる方たちの意見を聞くことが大切ではないかということを認識するために、本日のテーマ設定とした。 ・次回もテーマ設定をして、委員会を開催するので、また意見を述べていただきたい。
以上	